

〈特集〉 20世紀メコン・デルタの開拓

序

高 田 洋 子*

メコンデルタの農業生産力は、フランス植民地支配下の20世紀前半にかなりの発展をみたが、第2次世界大戦後は民族解放闘争から継続した内戦と国際紛争の戦火の中で、その潜在力は十分に開花されなかった。その後、南北統一が果たされたベトナム領メコンデルタでは、一元化した権力の指揮下で組織的な水利事業が遂行された。そして集団化政策の失敗を経て、1988年以降に、農業部門における本格的なドイモイ（刷新）政策が施行され、家族を単位とする農業経営への復帰と市場経済化への移行が容認されるや、デルタの農業は劇的に変化した。メコンデルタ100年間の農業発展を概観する時、生産力の爆発的増大をみた世紀末の10年間は、20世紀初頭の“*Mise en valeur*”の時代と並ぶ第2の画期的時代と位置づけられるだろう。

日本では、1970年代前半に京都大学東南アジア研究センターを中心として、メコンデルタの稲作および農村社会に関する総合的実地調査が組織された。当時の『東南アジア研究』誌上には、デルタの地形や土壌、水文、農業に関する優れた調査報告、関連諸分野の論文が次々と発表された。緊迫したベトナム戦争下で行われた実地調査に基づく一連の諸研究は、自然・人文・社会諸科学の様々なディシプリンによるアプローチを吸収し、メコンデルタ稲作社会の総合的研究を志向していたように思われる。¹⁾ とはいえ、1960年代を中心としたアメリカ人による農村社会の研究²⁾と同様に、ベトナム戦争の終結とともにそれらの取り組みは短命に終わった。

本特集は、それから約20数年後に実施された臨地調査³⁾に基づく、20世紀メコンデルタの農業開拓に関する共同研究の成果の一部である。1990年代に入ってベトナム政府は、対外開放政策の一環として、外国人研究者による農村調査を少しずつ認可し始めた。私たちの臨地調査は、

* 敬愛大学国際学部; Department of International Studies, Keiai University, 1-9 Sanno, Sakura-City, Chiba 285-8567, Japan

- 1) Takaya [1974] をはじめとする『東南アジア研究』第12巻2号と第13巻1～2号。
- 2) Hickey [1964], Sansom [1971], Callison [1983] など。これらの文献解題は村野 [1999]。メコンデルタ開拓史としては、南部ベトナム人研究者による Son Nam [1973]、仏領コーチシナ時代の文献・史料を用いて社会経済を論じた Brocheux [1995] が代表的な基本文献。植民地期の土地制度と開発は高田 [1984a; 1984b]。
- 3) 1990年代のメコンデルタの現地調査に基づく研究として、管見の限りでは、カントー省のハウ河自然堤防上の農業を地理学的手法で調査した Klebert & Marius-Gnanou [1996]、多角的農業推進のための農学および農業経済学研究をまとめた論文集 Vo-Tong Xuan and Matsui [1998]、とりわけ1990年代半ばにカントー省において行われた農民の家計調査を基に、農村の流動性、農家経営

こうした時期に、1995～1997年度文部省科研費補助金国際学術研究〔メコンデルタ農業開拓の史的研究(課題番号07041031)〕の財政支援を得て、メコンデルタの歴史や農業研究に関わる日本・ベトナム・フランスの専門家チームを組織して実現した。⁴⁾ 3年間の全調査概要、フィールド・ノートの記録、収集データの一覧、報告論文等は、『メコン通信』No. 1-No. 6に収録されている。⁵⁾

私たちの共同研究の目的は、研究組織者の一人である Nguyen Huu Chiem (ベトナム国家カントー大学) が作成したデルタの地形区分 [Nguyen Huu Chiem 1993: 161] に依拠して、各地形ごとに異なるメコンデルタ農村の多様な諸相を明らかにすることに置かれた。自然条件に規定された農村社会の開拓史を丁寧に探求することを通して、単調に見えるデルタの農業社会が、それぞれに歴史的に異なる背景をもつ諸地域から構成されていることを明らかにしたいと考えた。そこで歴史学、農学、地理学、社会学等の異なるディシプリンを持った共同研究者は、メコンデルタを構成する重要な地形上の典型的村落を調査対象に選定し、それぞれの関心ある時期と主題を立てて農業史にアプローチした。共同研究の各サブ・グループが注目した地形と村落は、(Ⅰ)海水の浸入する低地と砂丘微高地が入りくんだ海岸複合地形と呼ばれるメコン河下流部の村落、(Ⅱ)デルタ西部の氾濫原と広大低地のなかの村落、(Ⅲ)メコン河が複数の支流に分かれ、潮汐作用の影響も被るデルタ中央部の村落、そして(Ⅳ)デルタ周縁部の排水不良の大洪水地帯で硫酸酸性土壌を含み、今なお開拓最前線の村落、という4タイプであった。

率直に述べて、これらの事例で20世紀メコンデルタ開拓の全貌を網羅するには不十分である。しかしながら、4つの事例は、それぞれメコンデルタの異なる地形に規定された地域性を十分に代表すると同時に、本格的開拓が開始されたこの100年の農業発展の基本的特徴も有している。またそれぞれの論文が扱う時代、テーマ、対象は、どれも20世紀におけるメコンデルタの農業開拓が内包した極めて重要な諸問題ばかりである。各論文の概要を、次に手短かに紹介

↙ の適正規模、土地なし農家についての興味深い分析が見られる Yamazaki and Duong Van Ni [1999; 2000], また文化人類学調査をソクチャン省の村で行った中西 [1998; 1999], アンザン省の農業状況を論じた出井 [1999], 最近の農業状況を調査した野間・原田 [1998] などがある。

- 4) 全メンバーは、研究代表者：高田洋子(千葉敬愛短期大学・後に敬愛大学)、研究組織者：桜井由躬雄(東大)、田中耕司(京大東南アジア研究センター)、中村圭三(敬愛大)、河野泰之(京大東南アジア研究センター)、Nguyen Huu Chiem(ベトナム国家カントー大学)、Pierre Brocheux(パリ第7大学 Denis Diderot à Paris)。研究協力者：Nguyen Dinh Dau(ホーチミン市社会科学評議会)、Nguyen Quoi(ホーチミン市社会科学院)、大野美紀子(立命館大学院生)、松尾信之(東大大学院生)、岩井美佐紀(一橋大大学院生)、今村宣勝(東京外大大学院生)、野口博史(上智大大学院生)、森絵里沙(上智大大学院生)、古屋博子(東大大学院生)。カッコ内は調査時の所属を示す。
- 5) 『メコン通信』千葉敬愛短期大学、敬愛大学国際学部高田洋子研究室発行、No. 1(1996年4月)、No. 2(1997年3月)、No. 3(1997年7月)、No. 4(1998年3月)、No. 5(1998年7月)、No. 6(2000年11月)は、3年間の成果をまとめた調査報告論文10編を掲載する。

することにしたい。

高田の第1論文は、クメール族、キン（ベト）族そして中国系混血が住むチャヴィン省の砂丘上村落における開拓史を取り上げる。同省は、前述の地形区分（Ⅰ）の海岸複合地形を代表する。調査村はメコンデルタの多民族農業社会の典型例である。先住クメール族による砂丘上の水田耕作と地下水を利用した畑作の実態、海岸低地の開発過程とキン族の進出に伴う両民族の関係史が描かれる。ここでは、フランス植民地期の公文書や統計からみるチャヴィンの農業社会が、現在と異なり、20世紀初頭には相対的に豊かであった可能性が示唆されている。また、土地所有に規定された複雑な階層社会が、植民地支配の終焉と同時に崩壊していった過程が、聞き取り調査を基に論じられる。

第2論文は、運河の掘削によって開かれたハウ河以西の典型的なデルタ社会を取り上げる。調査村は、カントー省西部の地形区分（Ⅱ）に位置している。論文の前半は氾濫原の村の開拓史を高田が、後半では同地域におけるフランス人農園の開墾と撤退の歴史をブロシュが執筆した。ハウ河以西のいわゆるトランスバサック地方は、植民地経営の大黒柱となるコーチシナ輸出米の重要な生産現場であった。広大低地氾濫原の「新しい村」で、メコンデルタ西部に特有の不在大地主制が成立していく過程とインドシナ戦争中の混乱、フランス人の米作農園が、新生ゴージンジェム政権とフランス政府との政治的交渉を経て、失われた過程が明らかにされる。周知の通り、ブロシュはフランスにおけるコーチシナ経済史研究の第一人者である。

河野論文では、メコンデルタの地形と水文環境に基づく6つの類型が提示され、それらの開拓順位が大胆に考察される。カントー省の氾濫原上の村落での実態調査から、ベトナム共和国期以降の3つの時期ごとに、運河網の発展と農業の多期作・集約化の関係、農業制度の変遷と農業生産に与えた影響が検討される。20世紀末に実現した農業生産力の急上昇、いわゆる緑の革命の背景が、社会水文学的視点から議論される。

次の3論文は、西ヴァムコ川右岸のタンアン市（ロンアン省）にほど近いキン族の農業社会を扱う。地形区分（Ⅲ）の東端に含まれる調査村は、1950年代末から60年代にかけてアメリカのグループによる社会調査が実施された。

まず桜井論文は、カインハウ村⁶⁾の歴史地理環境と現代の都市近郊村落としての特徴を述べた後に、ベトナム北部の紅河デルタ村落で実施した同様の調査票による全戸調査の集計結果を比較分析する。そして、1990年以降のドイモイ、市場経済の発展のなかで、カインハウ村落では紅河デルタと同様に稲作の集約化、農業全域の多角化そして非農業化の現象を加速させている、と述べている。また、同村の土地なし層を救済対象としたタップムオイ平原への入植事業

6) Khanh Hau はベトナム南部ではこの表記が実際の発音に近いが、執筆者によっては標準語風にカインハウとも表記する。

の問題点が指摘され、未耕地の開拓より、人々の都市型労働への移行が今後は進むだろうと、筆者は論じる。

大野論文は、メコンデルタにおける農業の集団化と解体の実態を、カインハウ村での精力的な聞き取り調査から明らかにしようとしている。生産集団の編成と労働調整（ディウコン）の実態が報告され、Hendry 報告を援用して集団化前後の農業生産性の変化を検討する。また、集団化が農家経済に与えた影響について、分析している。メコンデルタにおける「集団化」の時代の実態を窺い知るひとつの貴重な事例を、この報告は提供している。

岩井論文は、ドイモイ以降の稲作の集約化がもたらした雇用機会の拡大を背景に、復活した農業賃労働の差配「チュム・カイ」の実態を考察している。土地保有の零細化がすすみ、今やカインハウの全ての世帯が農村内の様々な雑業収入に依存せざるを得ない家計状況にあるという。この差配制度の労働管理や労賃の支払方法などが報告されたあとで、差配による仕事の均等配分の原則、また雇用関係に見られる温情主義と差配制度の重要性が指摘される。

最後に田中論文は、デルタの周辺部に残された農業条件の最も厳しい地域（地形区分IVに含まれる）において、現社会主義政府が推進した国営農場による開拓の実態を扱う。タップムオイの葦の平原、カマウ半島のウーミンの森、カンボジア・ベトナム国境地帯の残丘周辺と西側低地は、フランス植民地時代は人跡未踏の処女地として残された。その後は、ベトナム共和国政府によって開拓民が投入されたが、激しい戦闘下で農業耕作は容易に進まなかった。集団農業の実験場とされた開拓最前線の入植政策と、その諸問題が明らかにされる。

冒頭で触れたように、現時点から見て、臨地調査を実施した1995年から1998年は、ドイモイ政策の広がりによって南部ベトナム社会全体が大きな社会変化を経験していた直中であった。収集した多くの諸資料の十全な解析には、さらなる時間と労力が注がれる必要があるし、調査者の視点が、時代の制約から自由であったか否かも問われなければならない。読者の客観的なご批判を仰ぐことができれば、幸いである。

最後に、私たちの調査は個別農家での直接のインタビューによる方法を重視したために、現地行政当局の許可を得るのが屢々容易でなかった。調査が行き詰まったそのような時に、調査の学問的意義を理解され、適切かつ強力な支援を賜ったベトナム日本両国の関係各位の諸先生方、またそれぞれの村で調査の便宜を取りはからって下さった地方当局の方々、そして何より労働の手を休めて聞き取り調査の時間におつきあい下さった農民のみなさんに対して、調査チームを代表して心からの謝意を申し上げたい。

引用文献

Brocheux, Pierre. 1995. *The Mekong Delta: Ecology, Economy and Revolution, 1860-1960*. University of Wisconsin-Madison, Center for Southeast Asian Studies, Monograph Number 12.

- Callison, Charles Stuart. 1983. *Land-to-the-Tiller in the Mekong Delta: Economic, Social and Political Effects of Land Reform in Four Villages of South Vietnam*. Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, Berkeley.
- Hickey, Gerald C. 1964. *Village in Vietnam*. New Haven and London: Yale University.
- 出井富美. 1999. 「ドイモイ政策以降のベトナムの農家経済の現状と問題点」『ベトナムの農業・農村の改革と変容』出井富美・竹内郁雄(編), 39-60ページ所収. アジア経済研究所.
- Klebert, Christian; & Marius-Gnanou, Kamala. 1996. Revolution verte et collectivisation des terres dans le delta du Mekong: L'exemple de la plaine de Rach Noch. *Les Cahiers d'Outre-Mer Vietnam, Revue de Geographie de Bordeaux* No. 196, 49e annee, octobre-decembre: 338-360.
- 村野 勉. 1999. 「アメリカ人研究者が観察したメコン・デルタ——1950年代末から1970年代初めの農村調査」『ベトナム農業・農村の改革と変容』出井富美・竹内郁雄(編), 23-37ページ所収. アジア経済研究所.
- 中西裕二. 1998. 「世帯を通してみたベトナム南部村落における親族の位置づけ」『東洋文化』(東大東洋文化研究所) 78: 13-39.
- . 1999. 「ベトナム南部ソクチャン省D村における信仰と祭祀——宗教的複合状況に関する基礎的報告」『ベトナムの文化と社会』第1号. 風響社.
- Nguyen Huu Chiem. 1993. Geo-Pedological Study of the Mekong Delta. 『東南アジア研究』31(2).
- 野間晴雄; 原田由起乃. 1998. 「加速するメコンデルタ農業の変容——フィールド・ノートから」『奈良大地理』(奈良大学地理学会) 4: 12-28.
- Sansom, Robert. 1971. *The Economics of Insurgency in the Mekong Delta of Vietnam*. The M. I. T. Press.
- Son Nam. 1973. *Lich Su Khan Hoang Mien Nam* 『メコンデルタ開拓史』. Saigon: Dong Pho.
- 高田洋子. 1984a. 「植民地コーチシナの国有地払下げと水田開発——19世紀末までの土地政策を中心に」『国際関係学研究』(津田塾大学) 10: 79-94.
- . 1984b. 「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』22(3): 241-259.
- Takaya, Y. 1974. A Physiographic Classification of Rice Land in the Mekong Delta. 『東南アジア研究』12(2): 135-142.
- Vo-Tong Xuan; and Matsui, Shigeo, eds. 1998. *Development of Farming Systems in the Mekong Delta of Vietnam*. Ho Chi Min City: JIRCAS, CTU & CLRRI.
- Yamazaki Ryoichi; and Duong Van Ni. 1999. Modification of Farmers' Differentiation Process and Role of Farmers' Organizations: A Case Study in Hoa An Village, Mekong Delta of Vietnam. *JIRCAS Journal for Scientific Papers* No. 7: 117-132.
- . 2000. Two Types of Landless People in the Mekong Delta. *Vietnam's Socio-Economic Development*, No. 22 (summer): 32-42.

Land-Use Development in the Mekong Delta in the Twentieth Century

Preface

TAKADA Yoko*

Agriculture in the Mekong Delta was developed to some extent in the first half of the twentieth century during French colonial period. In the latter half, however, the Mekong Delta became a battlefield of the civil war and international conflict caused by the interferences of the super powers, and the Vietnamese people had no chance to develop the potential of the land. It was just after the unification of Vietnam that a big irrigation project was undertaken under the unified political power. Then, the Doi Moi policy in agriculture since 1988 and the introduction of the market economy promoted dramatic change in agriculture. Surveying the development of agriculture in the Mekong Delta, the last decade of the twentieth century can be regarded as the second peak of development since the “mise en valeur” period of the early twentieth century.

In Japan, the first comprehensive research on agriculture and rural society in the Mekong Delta was done by the Center for Southeast Asian Studies and other scholars in the early 1970s. Many articles and research reports on geography, hydrology, and rice agriculture in the Delta were published in the Center’s journal, *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies]. The research done during the Vietnam War and the various papers based on them, with approaches from the natural sciences, humanities, and social sciences, aimed to comprehensively study rice agricultural society in the Mekong Delta. However, as in the case studies in rural societies by Americans in the 1960s, those studies were discontinued after the end of the Vietnam War.

The articles published here represent the small, but important results of the first joint research done in the Mekong Delta since research was discontinued until 1980s. In 1990s, the Vietnamese government began to accept agricultural research teams from foreign countries. We formed a research team, whose members consisted of historians, agronomists, sociologists, and geographers from Japan, Vietnam, and France, with a

* Department of International Studies, Keiai University

research grant from the Ministry of Education, Science and Culture, government of Japan (History of Agriculture in the Mekong Delta, team leader, Takada Yoko, Keiai University, 1995–97). We also published *Mekong Report*, Nos. 1–6 containing articles, research summaries, field notes, and lists of data collected during the research.

The aim of the research was to uncover the diversity in agricultural societies in the Mekong Delta. The diversity stems from the geographical characteristics classified by Nguyen Huu Chiem¹⁾ of Cantho University. We tried to make clear that rural society in the Delta, superficially monolithic, consists of several regions with different historical backgrounds. Then, research members with different disciplines like history, agronomy, sociology, and geography, selected geographically typical villages in the Delta for the research, and studied their agricultural histories and social development according to the member's own interest.

The villages selected are 1) a village that stands at the mouth of the Hau River in a coastal complex composed of lowland of brackish soil and sand ridges (*giong*), lagoons and mangroves; 2) a village in the central Delta where the Tien River is split into several streams and affected by tides, where the flood spreads slowly; 3) a village in a broad depression floodplain on the right side of the Hau River in the western Delta; and 4) a village on the frontier in an inundated area at the edge of the Delta with acid sulfate soil.

These four typologies do not cover the full diversity of agricultural development in the Mekong Delta. However, those four represent unique characteristics of locality, different from land forms, and also have the common feature of agricultural processes. The authors chose crucial factors to study land-use development and rural society in the Mekong Delta in the twentieth century. We believe that our research promotes the study in the agricultural development in the Mekong Delta.

1) Nguyen Huu Chiem, "Geo-Pedological Study of the Mekong Delta," *Tonnan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 31(2), 1993. As another classification of agricultural zones by Ryoichi Yamazaki, see "Agricultural Zoning Based on an Economic Viewpoint in the Mekong Delta of Vietnam," *JIRCUS Journal-for Scientific Paper*-, No. 8, 2000.